

なら平城京展 '98

■『なら平城京展 '98』の開催

この展示会は、朱雀門・東院庭園復原記念及び奈良市制施行100周年記念事業の一環として、1998年4月17日から8月23日まで奈良市、福岡市、東京都の三会場で開催されたものである。平城京に関する本格的な展示は1989年の『平城京展』、1991年の『長屋王「光と影」展』以来である。今回の展示は平城京を「都市」という視点で捉え、都市の様子とそこに暮らす人々の生活を「庶民」と「貴族」の生活として対比させ再現するとともに、平城京が中・近世を経て現代の奈良市へ受け継がれていった経過を示す展示を試みた。対象とした時代が長期間にわたる為、平城京については平城宮跡発掘調査部が、中・近世の奈良については奈良市教育委員会が各々展示を分担した。

展示は、

I・奈良文化の伝統（元禄の大仏の再興、社寺の都・南都、町のにぎわい、奈良から平城へ）

II・平城京の世界

の順とし、現代の奈良市から平城京の時代へタイムトンネル風に順に遡る手法をとった。平城京の世界では、平城京での生活を種々の側面から紹介することに主眼をおいたため、都城の歴史や平城京以外の地域等につい



ては敢えてふれなかった。展示のテーマとサブテーマは以下の通りである。1・平城京の生活と住民（衣・食・住、都に住む人々）、2・平城京の造営と経済（都市を造る、物資の流通と消費、街の景観）、3・みやこびとの哀歓（都市問題の発生と解消、住民の楽しみ）、4・みやこの精神生活（死者の世界、神と仏）、5・外交と内政（宮廷の生活、異国との交流）。なお、延べ99日にわたる開催期間中の入場者は80,004名であった。（川越俊一）

開催地	開催日	日数	入場者
奈良そごう美術館	4/17(金)～5/17(日)	30日	19,118
福岡市博物館	5/27(金)～7/5(日)	35日	18,472
三越美術館・新宿	7/18(金)～8/23(日)	34日	42,414
合 計		99日	80,004

なら平城京展 '98開催地および入場者数

ノ ー サ イ ド M E M O

◆おめでとうございます！

・古尾谷知宏さん（平城宮跡発掘調査部）は、東京大学から博士（文学）の学位を授与されました。

・小野健吉さん（平城宮跡発掘調査部）は、論文「京都を中心にした近代日本庭園の研究」により、京都大学から博士（農学）の学位を授与されました。

◆所員の出版物アラカルト

吉川弘文館から寺崎保広さんは、深き緑で結ばれた『長屋王』をだしました。構成は、第一 長屋王の誕生まで（父高市皇子／母 御名部皇女／長屋王の生年）第二 大納言まで（妻吉備内親王／

式部卿／官人としての長屋王）第三 長屋王の邸宅（平城京／平城京左京三条二坊の発掘／佐保の宅と左京三条二坊との関係）第四 長屋王家木簡の概要（長屋王家木簡出土の遺構／木簡の内容／長屋王家木簡出土の意義）第五 長屋王家の生活（宅内の居住者／王家の経済基盤）第六 長屋王の変（長屋王首班時代／長屋王と仏教／長屋王の変）結 長屋王小伝です。

また同成社から浅川滋男さんは、奈文研で行った白熱したシンポジウムをまとめ『先史日本の住居とその周辺』をだしました。第I部 堅穴住居の系譜 第一

章 日本の堅穴住居 第二章 極東の堅穴住居 第三章 中国・朝鮮半島の堅穴住居 第四章 堅穴住居の起源と系譜に関する総合討論 第II部 平地住居と高床建物－「掘立柱建物」をめぐる諸問題 第五章 縄文集落と掘立柱建物 第六章 弥生時代の大型掘立柱建物 第七章 南方と北方のクラ－高倉と校倉の伝来 第八章 第二部総合討論・掘立柱建物の機能と構造 付節 中日文化の関係からみた縄文・弥生時代の掘立柱建物 結章 ①シンポジウムの成果と課題 ②日本住居の源流・系譜を求めて－学際研究への道となっております。